

JADS

JAPAN ART DOCUMENTATION SOCIETY
アート・ドキュメンテーション学会

JADS

アート・ドキュメンテーション学会
第37回（2026年度）年次大会 予稿集

2026年6月6日（土）・7日（日）

立命館大学衣笠キャンパス

創思館1階カンファレンスルーム

及び オンライン開催

アート・ドキュメンテーション学会 2026年度年次大会プログラム／目次

2026年6月6日(土) 13:00 - 18:00

13:00- 開会挨拶 田良島 哲(アート・ドキュメンテーション学会会長)

【シンポジウム アート・アーカイブの社会実装】 13:10 - 16:50

p. 5

13:10- [趣旨説明] 赤間 亮(立命館大学デザイン・アート学部長)

13:20- [基調講演] 小田裕和(立命館大学デザイン・アート学部 准教授)
「社会に息を吹き込むアート」——アーカイブが耕す美的感性の可能性

14:00- [報告 1] 宮田 悠史(ZEN 大学コンテンツ産業史アーカイブ研究センター)
幅広い「研究参加者」によるデジタルアーカイブ活用の展望と課題
:ZEN 大学オーラル・ヒストリー コレクションに関する動向を中心に

14:30- 休憩

14:50- [報告 2] 藤田千織(国立文化財機構 文化財活用センター)
一期一会の博物館～文化財データベースの一活用法～

15:20- [報告 3] 大橋正司(サイフォン合同会社)
アーカイブをまちに手渡す——市民協創のための情報環境設計の実践

15:50- 休憩

16:00- ディスカッション

16:40- クロージング

【第20回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・奨励賞授賞式】 17:00 - 17:50

p. 8

【懇親会】 18:00 - *オンライン配信なし、現地のみ

会場:立命館大学 衣笠キャンパス内 充光館 1F
参加費:5,000 円(事前申込制)

2026年6月7日(日) 10:00 - 16:55

【学会総会】

10:00 -12:00 (会員限定) *オンライン参加のみ、現地ではWi-Fi利用可

【研究発表会】

13:00 -14:40

- 13:00-13:25 [発表1] 戸塚史織(立命館大学デザイン・アート学部) p. 10
フレデリック・W・グーキン関連資料の統合的デジタルアーカイブ
—研究者アーカイブを基軸とする多層的研究空間の構築—
- 13:25-13:50 [発表2] 溝上心太(東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻
文化経営学専門分野 博士課程) p. 12
美術分野デジタルアーカイブにおける「つなぎ役」機関の機能に関する調査報告
- 13:50-14:15 [発表3] 藤岡洋(京都大学) p. 14
創作活動のための芸術資源アーカイブは可能か
——京都市立芸術大学・総合基礎実技授業リポジトリ構築の試みから
- 14:15-14:40 [発表4] 福田博同 p. 16
(雪舟国際美術協会会員, 跡見学園女子大学文学部名誉教授)
持続可能な知識記述のための意味的区切り記号(ArtF 方式)

【ポスターセッション(ライトニングトーク)】 14:40 -14:55

- [発表1] 山内棕子(東京大学) p. 24
絵本原画展の記録と分類——展示リスト作成による研究方法の検討——
- [発表2] 矢部恵子(フリー) p. 24
「平沢大暲——『軍用ジャンク』(未発表・個人蔵)ら軍命作品にみる画家の仕事」
- [発表3] 赤間亮、平野理紗子(立命館大学アート・リサーチセンター) p. 25
福井久美子(アーツカウンシル東京)
東京芸術劇場の公演資料等デジタルアーカイブプロジェクト

【活動紹介】

14:55 -15:05

- 14:55-15:00 [活動紹介1] 渡辺哲成(日本事務器株式会社) p. 26
専門図書館のDXを加速させる「ネオシリウス・ラボ」と「INFOLIB」の活用
- 15:00-15:05 [活動紹介2] 立川有理子(株式会社ポーラ・オルビスホールディングス
コーポレート室 ポーラ文化研究所) p. 26
ポーラ文化研究所 50年の活動とデジタルでの情報発信の取り組み

【ポスター発表】	15:05 -15:30	<small>*オンライン配信なし、現地のみ</small>	
【研究発表会】	15:30 -16:45		
15:30-15:55	[発表5]	三谷直哉(文化財防災センター) 上相英之(文化財防災センター) 文化財レスキュー日報の知識構造化に関する基礎的研究 ——日報記録の再利用に向けた構造化データベース設計の検討	p. 18
15:55-16:20	[発表6]	大井将生(同志社大学 文化情報学部) 小澤翔瑛(同志社大学 文化情報学部) 水谷一路(同志社大学 文化情報学部) 星初夏紀(同志社大学 文化情報学部) 白井麻美(アーツカウンシル東京) 〈たてももの〉文化情報の「教材化」方法論	p. 20
16:20-16:45	[発表 7]	栗原祐司(国立科学博物館) パール下中記念館資料のアーカイブ	p. 22
16:45-16:55		閉会の挨拶 本間 友(アート・ドキュメンテーション学会 幹事長)	
		第 19 回 秋季研究集会のご案内	p. 27
		『アート・ドキュメンテーション研究』第 35 号 原稿募集	p. 27
		アート・ドキュメンテーション学会 刊行物ご案内	p. 28
		アート・ドキュメンテーション学会 入会のご案内	p. 29

シンポジウム 「アート・アーカイブの社会実装」 6月6日(土) 13:10 - 16:50

アートに関わるアーカイブ構築とその利活用は、アート・ドキュメンテーション学会創設以来、活動の根幹となる研究分野だが、この30年あまりの情報通信技術の発達と社会の変化は、アート・アーカイブの利活用の潜在的可能性を大きく広げてきた。デジタル情報の高品質化、情報探索手段の高度化・精緻化、情報源間の連携の深化などにより、良質な情報がより幅広く、社会のさまざまな人々や集団に享受され得る条件が整いつつある。

その一方で、これらの豊富な情報が、社会のどのような場面で活用できるのか、またどのような手段・回路をとれば効果的に伝わってゆくのか、という社会実装の局面においては、研究・実践ともに緒についたばかりであり、今後、さまざまな課題に取り組むことによって、見通しを得てゆかなければならない。

今回の大会シンポジウムでは、社会課題に対し、アートを持つ力を活用することで、より幅広い視点から研究・教育に取り組むことを目指して創設される立命館大学デザイン・アート学部・研究科との共催により、アート・アーカイブの社会実装について、理論と実践の両面から先駆的な事例に関する報告を受け、参加者とともに議論を深めたい。

基調講演

「社会に息を吹き込むアート」—アーカイブが耕す美的感性の可能性

小田裕和 (立命館大学デザイン・アート学部 准教授)

組織変革や新たな価値創造の現場では、未知の可能性に向かう探索的な営みが不可欠である。そしてその探索を駆動しているのは、アスピレーション—「何をを目指すか」という方向感覚—にほかならない。ではアスピレーションはどこから生まれ、どのように更新され続けるのか。その源泉にあるのは、分析や戦略的判断に先行する、感覚的・美的な判断である。「これは面白い」「これは美しい」「これは違う」という pathos の感知の積み重ねが、個人や組織の向かう方向を構成していく。

本講演では、この観点からアートアーカイブ・ドキュメンテーションを「美的感性を耕すインフラ」として捉え直す視点を提示する。アーカイブが保存しているのは作品や記録にとどまらず、かつて人々が試行錯誤した中での感覚やアスピレーションの痕跡である。そして保存されたものごとと現在の人間・組織が会うことは、個人・組織・社会のアスピレーションに揺さぶりをかけていく。アートが社会に息を吹き込むとはいかなることか。そしてドキュメンテーションという営みが、私たちの社会にもたらす可能性について論じる。

小田 裕和 (おだ ひろかず)

立命館大学デザイン・アート学部准教授

専門はストラテジックデザイン。株式会社 MIMIGURI にて、大企業を中心とした組織変革・価値創造のコンサルティングに携わったのち、現職。

著書に『リサーチ・ドリブン・イノベーション—「問い」を起点にアイデアを探究する』(共著、翔泳社、2021年)、『アイデアが実り続ける「場」のデザイン—新規事業が生まれる組織をつくる6つのアプローチ』(翔泳社、2024年)。

報告

幅広い「研究参加者」によるデジタルアーカイブ活用の展望と課題 ：ZEN 大学オーラル・ヒストリー コレクションに関する動向を中心に

宮田 悠史 (ZEN 大学コンテンツ産業史アーカイブ研究センター・講師)

ZEN 大学コンテンツ産業史アーカイブ研究センター (以下、HARC) は、我が国におけるコンテンツ産業の発展に寄与されたクリエイター・開発者・経営者・研究者らのオーラル・ヒストリーを映像によって収録し、それらのデジタルアーカイブ「オーラル・ヒストリー コレクション」 (以下、OHC) を構築・運用している。

そこで、本発表ではオーラル・ヒストリーに関する研究プロジェクトの概要とともに、データベースの検索性などの仕様等について報告した上で、OHC における現状の活用状況と将来的な可能性について検討したい。

宮田 悠史 (みやた ゆうじ)

ZEN 大学コンテンツ産業史アーカイブ研究センター・講師

2025 年より現職。岐阜県出身。「映像デジタルアーカイブ」の活用に視点を置いた研究を実践的に進めており、これまでに「京都ニュースアーカイブ」「オーラル・ヒストリー コレクション」などの構築に関与した。また、自治体での勤務経験などを背景として、地域振興と映像を結び付けた研究も行っている。

一期一会の博物館～文化財データベースの一活用法～

藤田 千織 (国立文化財機構 文化財活用センター 企画担当課長)

文化財活用センターでは、高精細複製品やデジタルコンテンツなどを通してすべての人が文化財に親しむ機会を創出している。2026 年 6 月より東京国立博物館で公開される新コンテンツ「トールワンダーウォール 一期一会」では、12 万件もの所蔵品から今、何が展示されており、何を見るべきかをガイドするアプリケーションを開発した。所蔵品管理データベースから作成される東博ウェブサイトの「今日の展示作品リスト」と API 連携をして、12 万件の中から現在展示されている文化財だけを抽出し、さらに体験者が選んだテーマに沿って「おすすめの一点」を提示する。その一点について国立文化財機構全体のデータベースから画像や作品情報を引き出して体験者に提供する、というかたちで、文化財のデータベースを「博物館における作品との出会い」の演出に活用した。昨年度の当シンポジウムで紹介された「protoDB」「ColBase」といったデータベースのひとつの活用例を「使う側」の観点から紹介する。

藤田 千織 (ふじた ちおり)

国立文化財機構文化財活用センター企画担当課長。専門は博物館教育学。国立西洋美術館学芸課教育普及室を経て東京国立博物館へ。博物館教育課にてスクールプログラム・ファミリープログラムの企画・運営、ガイドアプリ「トールハクナビ」制作、教育展示「親と子のギャラリー」企画、ボランティア・コーディネーションなどを担当。2022 年より現職。体験型展示の開発等に携わる。

アーカイブをまちに手渡す——市民協創のための情報環境設計の実践

大橋 正司（サイフォン合同会社代表社員）

弊社ではジャパンサーチ（デジタルアーカイブ推進に関する検討会）の情報設計等を端緒として、デジタルアーカイブの利活用推進に携わってきた。近年は地域に根ざして、行政機関、博物館、図書館といった公的機関の収集する（あるいは発信する）情報と、地域の住民や企業が発信する情報をつなぐローカルの情報資源基盤構築を試みている。本発表では、新潟県小千谷市の「小千谷市ひと・まち・文化共創拠点 ホントカ。」で展開している市民参加型情報発信プラットフォームや、東京都武蔵野市で50年以上に渡り展開しているタウン誌「週刊きちじょうじ」の事例を通じて、市民参加・共創のハブとしてのアーカイブの活用事例を紹介する。

大橋 正司（おおはし しょうじ）

サイフォン合同会社代表社員、インフォメーションアーキテクト。武蔵野美術大学非常勤講師。

専門はサービスデザイン、アクセシビリティ、情報設計等。主にジャパンサーチ、国立国会図書館サーチ、国立国会図書館デジタルコレクションの情報設計・UI設計等に携わる。近年は行政機関におけるサービスデザインの普及浸透、標準化等にも従事。JIS Z8530、JIS X 25062 原案作成委員等を務める。

パネルディスカッション・質疑応答

ファシリテーター：赤間 亮（あかま りょう）

立命館大学デザイン・アート学部教授

早稲田大学演劇博物館助手、立命館大学文学部専任講師、立命館大学先端総合学術研究科教授、立命館大学文学部教授を経て、2026年4月から立命館大学デザイン・アート学部教授。演劇博物館で演劇資料デジタルアーカイブを実践。1998年立命館大学アート・リサーチセンターの設立に関わり、2003年からは、海外の博物館が所蔵する日本文化資源のデジタル化にも邁進。立命館 ARC では、文科省「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」(ARC-iJAC)の運営を行っている。

第20回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞 授賞式



2026年6月6日

第20回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞選考委員会

標記の賞について選考の結果、会員の皆様より推薦いただいた候補の中から「学会賞」1件、奨励賞評価委員会からの推薦による候補者から「奨励賞」1件の授賞を決定いたしました。今後とも本賞の発展にご協力くださいますよう、お願いいたします。

第20回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞・同奨励賞選考委員会

委員長:田窪直規 委員:田良島哲、嘉村哲郎、黒田結花、本間友

第20回 野上紘子記念 アート・ドキュメンテーション学会賞

受賞: 田路 貴浩 氏、齋藤 歩 氏、京都大学研究資源アーカイブ

「増田友也建築設計関係資料, 1930-1984(主年代1950-1981)」の調査・整理と公開等の活動に対して

授賞理由:

増田友也(1914-1981)は、兵庫・淡路島に生まれ、京都帝国大学工学部建築学科を卒業、1950年から1978年まで京都大学で教鞭をとるかたわら、京都大学総合体育館(1972)など学内の建築のほか、徳島県鳴門市での鳴門市文化会館(1982)をはじめとする多くの公共建築の設計に携わった。第二次大戦後の日本を代表する建築家の一人である。

増田の没後、約15,000点の設計図面、約7,000点の写真をはじめとする資料は、後継の研究室に引き継がれてきたが、建築アーカイブズとしての調査に着手したのが、田路貴浩氏である。田路氏は、京都大学が2000年代以降構築を始めた「研究資源アーカイブ」の枠組みを利用し、総合博物館で研究資源アーカイブを担当する齋藤歩氏とともに、各種資料の整理を進めた。2024年には、調査の成果である目録および図面・写真のデジタル画像を「京都大学デジタルアーカイブシステム」のウェブサイトで公開し、広く利用に供している。情報の記録は、アーカイブズ資料の整理原則に即した方法で行われており、資料利用者は、公開データベースから資料の管理状態を明確に把握することができる。国内で運用されている建築資料の情報公開としては最も行き届いた手法が採られており、同種の資料整理に従事する者にとって学ぶところが大きい。

目録作成、資料のデジタル化と並行して、アーカイブズの社会へ向けての発信や関係者との連携も積極的に進められてきた。2021年には京都大学総合博物館で展覧会「増田友也の建築世界—アーカイブズにみる思索の軌跡」を開催、その後、作品集が刊行された。また、増田の設計による建築が多く残る鳴門市に協力し、同市の「鳴門市増田友也建築デジタルアーカイブ」の構築や既存建築の改修への情報提供など、アーカイブズ資料の社会的な活用が図られている。

このように「増田友也建築設計関係資料」の調査と整理は、近現代建築と建築資料の保存活用という課題に対して、堅実なアーカイブズ構築と資料の公開を実現するとともに、その手法と過程を明らかにしており、研究と実践の両面で価値が高い。

以上の成果を評価し、第20回野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞を授与する。

【学会賞の概要】

以下a)、b)、c)のいずれかに該当するものを選出する。対象は会員に限らない。

a) Museum、Library、Archivesをはじめとするアート・ドキュメンテーション関係業務の現場において、効果的かつオリジナリティを発揮した者、あるいは機関。

b) アート・ドキュメンテーション分野の振興発展に寄与した功績が認められる者、あるいは機関。

c) アート・ドキュメンテーションに関わる論文・記事(学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』、『アート・ドキュメンテーション通信』への掲載に限らない)、図書、展覧会、データベース、ウェブサイト等のなかから優れたもの。対象となる論文・記事、図書、展覧会は、受賞年の前年度を含む過去3年間に発表されたものとする。

第20回 野上紘子記念 アート・ドキュメンテーション奨励賞

受賞: 原 翔子 氏 (東京大学)

研究発表「展覧会情報の階層的分析について」(JADS第36回(2025)年次大会 研究発表会)に対して

授賞理由:

展覧会情報を「基本情報・コンテンツ・文脈」の3層構造として捉え、分析する方法論を提案する研究であり、入場者数や来館者調査に基づく従来の手法に対し、複数の情報層にある公開情報を横断的に参照しながら、客観的な分析の枠組みを構築しようとする新たな試みである。外部公開情報に基づく予備的分析という現時点での限界を率直に示しつつ、ミュージアムによる情報整備の重要性を浮き彫りにしている点を含め、展覧会記録・評価研究に問題提起を行う意欲的な試みとして評価する。今後、方法論のさらなる検証と現場への応用を通じた発展を期待し、奨励賞を授与する。

【奨励賞の概要】

アート・ドキュメンテーション分野の発展における将来の貢献を奨励するため、本会が主催する研究発表会、シンポジウム、セミナー、ポスターセッション、活動紹介等で発表した登壇者、および『アート・ドキュメンテーション研究』に掲載された論文・記事の著者のなかから優れたものを選出する。対象は会員に限り、受賞年の前年度に発表、刊行されたものとする。

※第21回 野上紘子記念アート・ドキュメンテーション学会賞の推薦募集は、『アート・ドキュメンテーション通信』、および学会ウェブサイト、学会メーリングリスト等で告知いたします。会員の皆様には、積極的なご推薦をお願い申し上げます。

戸塚 史織 (とつか しおり)

立命館大学デザイン・アート学部 助教
立命館大学文学研究科博士課程後期課程修了。日本学術振興会特別研究員(DC1)などを経て、2026年より現職。専門は歌舞伎・浮世絵を中心とした日本文化研究・文化情報学。立命館大学アート・リサーチセンターを拠点に、文化資源のデジタルアーカイブとその活用研究に取り組む。主な論文に、「フレデリック・W・グーキン『勝川春章』研究原稿とその流布一勝川派研究史における一考察」(『浮世絵芸術』191、国際浮世絵学会、2026年)、「役者評判記における『絵』に関する記述の網羅的分析—歌舞伎と視覚文化の交差」(『アート・リサーチ』26(2)、アート・リサーチセンター、2025年)他。

溝上 心太 (みぞがみ しんた)

東京大学大学院人文社会系研究科文化経営学専門分野博士課程・国立アートリサーチセンター情報資源グループ特定研究員
京都大学文学部(西洋美術史)卒業、東京大学大学院人文社会系研究科(文化資源学研究専攻 文化経営学専門分野)修士課程卒業。同博士課程在籍中。コンサルティングファームでのデータマネジメント支援業務を経て、2025年11月から国立アートリサーチセンター在籍。専門は、美術館を対象とする文化政策学。

藤岡 洋 (ふじおか ひろし)

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・特任助教 / 京都大学附属図書館研究開発室・特定職員 / 京都市立大学芸術資源研究センター・客員研究員
立正大学大学院文学研究科哲学科卒業。東京大学人文社会系研究科象形文化研究拠点、国立西洋美術館、東京大学東洋文化研究所、京都市立芸術大学を経て、2024年から現職。専門は人文情報学、デジタルフィールドワーク。主な論考に「動的映像記録から「技巧」を採掘する—動的映像による調査記録における冗長性の正体」(Compost vol. 4, 2023)、「資料インデックスを目指す動的映像分析とその可能性」(アート・ドキュメンテーション研究 (30), 2022)。共著書に『接続する柳田國男』(水声社 2023)他。

福田 博同 (ふくだ ひろあつ)

雪舟国際美術協会会員、跡見学園女子大学文学部名誉教授
1965年、油彩肖像画受注。1966年国家公務員(-1998年)、横浜国立大学二部経営学部卒業後、光風会美術研究所等で洋画を修行、グループ展等に参加。1990年筑波大学附属図書館員時代「日本美術シソーラスデータベース絵画編(JART-P)」のPC検索作成、翌年科研費(DB公開促進費)を受け、筑波大学学術情報検索システム(UTOPIA)で公開(-2004年)、2005年Web頁公開(-現在)。2008年、水墨画主体の個展。2017年、跡見学園女子大学文学部助教授時代にセマンティック・インライン・マークアップ(SIM)入り論文「刀匠信国系図の総合的研究」公開(https://atomi.repo.nii.ac.jp/record/3364/files/atomi_bungaku53_25.pdf)2018年退職、名誉教授。2020年雪舟国際美術協会会員。2021年同会展で名誉会長賞受賞ほか。

三谷 直哉 (みたに なおや)

国立文化財機構文化財防災センター研究員
略歴：同志社大学文学部文化学科国文学専攻卒業。IT関連企業でのシステムエンジニアを経て、2023年から現職。2024年デジタルアーキビスト資格(特定非営利活動法人日本デジタルアーキビスト資格認定機構)を取得。専門は文化財情報、文化財防災、国文学。

上相 英之 (うえすぎ ひでゆき)

国立文化財機構文化財防災センター研究員
神戸学院大学現代社会学部、国文学研究資料館などを経て、2021年から現職。専門は人文情報学。主な制作物に「ひかり拓本」(iOSおよびAndroidアプリ、2023)

大井 将生 (おおい まさお)

同志社大学文化情報学部 准教授
東京大学大学院学際情報学府修了(博士)。東京大学大学院情報学環特任研究員、人間文化研究機構/国立歴史民俗博物館特任准教授等を経て、2025年から現職。文部科学省、文化庁、内閣府等の委員を歴任。専門はデジタルアーカイブの教育活用。主な研究に「ジャパニサーチを活用したキュレーション学習」「S×UKILAM(スキラム)連携」等。主な共著書に『デジタルアーカイブの理論と実践』(樹村房、2023)等。主な受賞歴に内閣府デジタルアーカイブジャパン・アワード(2022)、デジタルアーカイブ学会 学会賞 学術賞(研究論文)(2021、2023)、じんもんこん優秀論文賞(2024)、LODチャレンジ最優秀賞(2022)、優秀賞(2023、2025)、学術LOD賞(2024)、コミュニティ賞(2021)等。

小澤 翔瑛 (こざわ しょうえい)

同志社大学文化情報学部デジタルアーカイブ研究室4回生

水谷 一路 (みづたに いちろ)

同志社大学文化情報学部デジタルアーカイブ研究室4回生

星 初夏紀 (ほし はなき)

同志社大学文化情報学部デジタルアーカイブ研究室4回生

白井 麻美 (しらい あさみ)

東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京
昭和女子大学大学院生活機構研究科生活文化研究専攻修了。東京都江戸東京博物館にて常設展示や展示環境保全を担当後、資料係にて収蔵品の修理やデジタル化、保管環境等の保全を担当。また、資料情報システムの運用・改善にも携わる。現職では、都立文化施設が有する収蔵品などの文化資源をデジタル化し、多様な形態での鑑賞体験を提供する「TOKYOスマート・カルチャー・プロジェクト」に従事している。

栗原 祐司 (くりはら ゆうじ)

国立科学博物館理事・副館長
上智大学卒業。文部科学省、文化庁、東京国立博物館総務部長、京都国立博物館副館長などを経て、2023年から現職。ICOM執行役員(2025-2028)。専門は博物館政策、博物館経営。主な著作に『教養として知っておきたい 博物館の世界』(誠文堂新光社、2021)、『基礎から学ぶ博物館法規』(同成社、2022)、共著に『入門 スポーツと博物館』(同成社、2026)他。

フレデリック・W・ゲーキン関連資料の統合的デジタルアーカイブ —研究者アーカイブを基軸とする多層的研究空間の構築—

Integrated Digital Archive of Frederick W. Gookin-Related Materials:
Constructing a Multilayered Research Space Centered on a Researcher Archive

戸塚 史織*

TOTSUKA, Shiori

Resume:

本報告では、19世紀末から20世紀初頭にかけて米国における浮世絵研究を先導したフレデリック・W・ゲーキンを対象に構築した統合的デジタルアーカイブについて報告する。本研究では、立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）の国際ARCモデルを基盤として、活動情報、一次資料、研究過程資料を相互に接続する多層的研究空間を構築した。特に、書簡・研究ノート・未刊行原稿等の研究過程資料を、知識生成の痕跡を示す中核的資料として再定位し、著作やコレクション資料と横断的に接続した点に特徴がある。これにより、作品比較や図版照合、研究者間交流を通じた近代アメリカにおける浮世絵研究形成過程を、人物を基軸とする知識生成基盤として再構築する可能性を示す。

1. ゲーキン関連資料をめぐる課題

アメリカにおける浮世絵コレクションの形成は、19世紀末から20世紀初頭にかけて活動した個人コレクターや研究者によって支えられた。その中心人物の一人が、フレデリック・W・ゲーキン（Frederick W. Gookin, 1853-1936）である。彼は、浮世絵研究者・コレクター・キュレーターとして活動し、特にシカゴ美術館のクラレンス・バッキンガム・コレクション形成に深く関与した。

しかし、その活動や関連資料群は長く体系的に整理されてこなかった。著作、浮世絵・古典籍コレクション、書簡、研究ノート、未刊行原稿などは異なる管理体系のもとに分散しており、研究活動全体を横断的に把握する環境は十分に整備されていなかった。特に、研究過程を示す資料群の多くは未整理のまま残されており、近代アメリカにおける浮世絵研究の実態を検討するうえで大きな課題となっていた。

そこで本研究では、立命館大学アート・リサーチセンター（ARC）の国際ARCモデルを基盤として、ゲーキン関連資料群を三層構造として整理し、ゲーキンという人物を軸とする統合的デジタルアーカイブを構築した。これは、分散していた異種資料群を接続し、研究過程を含む知識生成の構造そのものを再編成する試みである。

2. 三層構造による資料統合

本研究では、ゲーキン関連資料群を「活動情報層」「一次資料層」「研究過程資料層」の三層として整理した。これは、個別資料のデータベース化にとどまらず、ゲーキンの活動、研究対象、研究過程を相互に接続するための構造化である。

2.1 活動情報層

活動情報層では、ゲーキンの活動を時間軸と媒体軸から整理するため「ゲーキン年表データベース」と「ゲーキン著書データベース」を構築した。

年表データベースでは、既存研究、展覧会カタログ、新聞記事、アーカイブ所収文書などに記された出来事を日付情報とともに整理し、関連人物・機関の活動を時系列上に配置した。

著書データベースでは、単著に加え、序文・解説を寄せたカタログや装丁担当書籍までを収集・整理した。これにより、浮世絵研究のみならず、装丁や出版文化を含めたゲーキンの活動媒体を横断的に整理した。

2.2 一次資料層

一次資料層では、シカゴ美術館所蔵のゲーキン収集浮世絵および古典籍資料を対象とした。

浮世絵資料については、シカゴ美術館の公開データとARC浮世絵ポータルデータベースを照合し、未登録作品の追加や既存メタデータの精査を行った。特にゲーキンが関心を寄せた勝川派作品

*とつか しおり（立命館大学）

は、続絵や同板作品が複数機関に分散して収蔵されているため、関連作品をグループ化し、所在関係や摺りの差異を比較可能な形で整理した。

古典籍資料については、高精細画像撮影によるデジタル化とデータベース化による目録整備を行った。さらに、冊子構造に対応した階層型データ構造を採用し、ページ単位での管理・参照を可能とした。これにより、コレクション構成や資料間関係を横断的に把握できる基盤を整備した。

2.3 研究過程資料層

研究過程資料層では、シカゴ美術館に残された書簡、研究ノート、未刊行原稿、図版複写資料など、ゲーキンの研究活動そのものを示す文書群を対象とした。これらは正式な出版物や美術作品ではなかったため、長年体系的整理の対象となりにくく、研究利用が困難な状態にあった。

本研究では、これらの資料を高精細画像として記録したうえで、資料種別、作成年代、関係人物などの基本情報を整理した。また、研究ノートや未刊行原稿については、作品観察記録や図版比較資料を含めて整理し、一次資料との対応関係を参照可能な形で接続した。

さらに、未刊行原稿については、正式出版されなかったにもかかわらず、複写本が複数国に伝存していたことが確認された。そこで、原稿本文だけでなく複写本の伝播状況も併せて整理し、人的ネットワークを通じた知識流通の過程を参照可能な形で整理した。これにより、従来補助資料として扱われがちであった研究過程資料を、知識生成の痕跡を示す中核的資料として再定位した。

3. 統合による知識生成過程の可視化

以上の三層構造による資料統合によって、従来は個別に扱われていた活動情報、一次資料、研究過程資料を相互に接続しながら参照可能な多層的研究空間が形成された。その結果、ゲーキンの活動を単なる個人史としてではなく、近代アメリカにおける浮世絵受容と知識生成の形成過程として捉えることが可能となった。

特に、活動情報層と研究過程資料層を接続することで、展覧会活動や出版活動と、書簡・研究ノート・未刊行原稿との対応関係を追跡できるよう

になった。これにより、ゲーキンの浮世絵研究が、作品比較、図版照合、真贋判断、研究者間交流などを伴う実証的研究実践として展開していた実態が具体的に確認された。

また、活動情報層と一次資料層を接続することで、研究関心と実際のコレクション構成との関係も明確となった。特に、勝川派役者絵や歌舞伎関連古典籍が重要な位置を占めていたことから、彼の浮世絵理解が役者絵研究を中心に形成されていたことが資料構成の面からも裏付けられた。

さらに、研究過程資料層と一次資料層を接続したことで、研究ノートや未刊行原稿で言及される作品と現存コレクションとの対応関係を確認できるようになった。加えて、未刊行原稿の複写本が複数国に伝存していた事実からは、近代アメリカにおける浮世絵研究の知識流通が、正式出版のみならず、私的複写や国際的ネットワークによっても支えられていたことが明らかとなった。

このように、本研究で構築した統合的デジタルアーカイブは、分散していた異種資料群を、人物情報を基軸として接続することで、作品、研究、交流、出版を含む知識生成過程そのものを可視化する研究空間として機能することが明らかとなった。これは、20世紀初頭の近代アメリカにおける浮世絵研究を再構築する知識生成基盤として位置づけられる。

4. 今後の展開と課題

本研究では、活動情報、一次資料、研究過程資料を、人物を基軸として接続することで、知識生成過程を横断的に参照可能な研究基盤を構築した。一方で、書簡や研究ノートについてはOCRおよび翻刻作業が依然進行中であり、継続的なメタデータ整備が求められる。

さらに今後は、シカゴ美術館以外の関連機関・コレクションとの接続を進めることで、近代アメリカにおける浮世絵研究の国際的知識ネットワークを、より広域的かつ横断的に可視化していくことが期待される。

本発表は公益財団法人日本科学協会 2025 年度 笹川科学研究助成による研究成果の一部である。

美術分野デジタルアーカイブにおける「つなぎ役」機関の機能に関する調査報告

The Functions of Aggregators in Art-Related Digital Archives in Japan

溝上 心太*

MIZOGAMI, Shinta

Resume:

本発表は、日本の美術分野デジタルアーカイブを対象に、美術館とジャパンサーチを仲介する「つなぎ役」に注目し、その政策的動機と機能を検討する。半構造化インタビュー、および公開資料のレビューを踏まえ、国内外事例との比較を通じて、現状機能と政策上期待される役割との乖離を明らかにする。

1. 研究背景

美術館とジャパンサーチを仲介する「つなぎ役」(アグリゲータ・ハブ)は、自らの領域的・地域的独自性を前提に、複数のアーカイブ機関から情報を収集・統合し、ウェブサイト上でそれを表現する主体である。その活動は、収蔵品管理を行う美術館とも、日本そのもののブランディングを担うジャパンサーチとも異なり、地方自治体・独法・民間レベルの文化事業を背景として、美術振興という政策的動機を持つと同時に、中間支援組織としての活動を行うことで、デジタルアーカイブ(DA)のさらなる推進に寄与する潜在性を秘めると評価できる。しかしながら、ジャパンサーチが鑑としたヨーロッパや米国のDPLAにおいては、モデル全体におけるつなぎ役の位置付け・機能が戦略的に議論されてきた一方、日本における理論的整理にはなお検討の余地がある¹⁾。

2. 研究目的

本発表では、文化政策の観点からDA事業を捉え、その政策的動機と機能を検証することを目的とする。そのために、特に美術領域におけるつなぎ役が現状保持している機能と、事業計画上のありべき姿との乖離を明らかにする。

3. 手法

日本における美術分野DAのつなぎ役機関に対する半構造化インタビュー、および事業背景となる政策文書のレビューを主な手法としたうえで、日本の他分野つなぎ役、諸外国(欧・米)におけるナショナルポータルおよび美術分野つなぎ役を対象とした、公開情報に基づく調査結果と比較する。

4. 結果

4.1 文化政策としてのDA構築

政策としてDAを構築することそれ自体が持つ潜在的暴力性は論を俟たず、特に国の統合ポータルにおける記憶の選別はナショナリズムと結びつき、市民アイデンティティの形成という内的動機と、クールジャパン戦略に代表されるような対外的イメージ獲得が暗黙の動機として存在する²⁾。こうした構図は、参照権と編集権の寡占を通じた統治の一形態として捉えることもできる。また、トップダウン的に機能モデルが実装されたヨーロッパナに対し、日本では、震災アーカイブを含む分野別・地域別・機関別のDA構築が個別に進展してきた。そのうえでジャパンサーチは、既存の多様なDAをメタデータ連携によって横断的に発見・活用可能にする、後発の統合ポータルとして構築された背景もあり、国家的な統制力が働きづらい点に特徴がある。このことは、政策実行の所管省庁が複数にまたがるという体制上の特徴から、総花的な施策が展開されその評価が困難という文化政策一般の課題と同根と言える³⁾。

ここで本発表が対象とする美術領域に目を転じDAにおける文化政策上の論点を検討するとき、「保存と活用」の議論は避けて通れない。フィジカルな文化財における保存と活用の二元論的言説が「両輪」の語に止揚され、「文化観光」という複合概念としての政策展開が指向される現在、デジタル化により新たな価値が付加された新たな「保存と活用」の系譜において、特に博物館法の望ましい基準改正でも明らかのようにその「発展的活用」が求められる。このことは、独法、地方自治体、民間による文化事業的背景を持

*みぞがみ しんた (東京大学大学院人文社会系研究科 文化経営学専門分野博士課程・国立アトリサーチセンター)

つ各つなぎ役機関における事業計画にも明確に反映されている。一方で「活用」評価の困難により、そのKPIは画像ダウンロード数や収蔵作品数、アクセス数など、部分的な定量指標に終始していると言える⁴。

4.2 つなぎ役機能の理想と現実

日本の美術分野つなぎ役機関を類型化するとき、独法・財団として傘下館の情報を集約しているケース、また地方自治体として地域内の美術館情報を取りまとめているケース、あるいは自らのデータベースをもたない窓口型のケースなど、その多様性が特徴として挙げられる。これによって、メタデータ作成支援・集約から権利情報の整備、活用支援に至るまで、つなぎ役として「あるべき」と政策上期待される機能の全体に対し、それぞれの機関が担う領域は様々ではない。ヨーロッパが「ポータルからプラットフォームへ」という標語のもと、集権的なピラミッド型の情報モデルから、構成機関がフラットに結びつく分散的なネットワーク型へ変化を図ったことを踏まえると、多様性を活かした全体設計が効果的と考える⁵。

さらに、作品の記述を行う美術館に対して、それらの情報を集約・運営するつなぎ役、という分業で運営される点も示唆的である。とりわけデータ品質の観点からみると、つなぎ役はその専門的機能の一部としてデータに主体的に関与する機

会が限定的と考える。欧米においては、トップダウン的にアグリゲータ間のコミュニティ形成を支援しつつ、その一つの基準としてデータ品質担保をアグリゲータの責に置いている点と比較すると、日本の実態は異なる構造にある。

5. 考察

文化庁は、美術館各館のリソース不足に起因し、美術分野DA推進は依然として低調と評価する⁶。他方、美術分野DAのさらなる推進においては、経営資源のひっ迫する美術館単体ではなく、美術館・ジャパンサーチ・つなぎ役の三者を総合的に捉えることで、適切な機能配置を検討する必要がある。今後つなぎ役は、コミュニティを形成しその活動を対外発信することによって、DAの作成・公開のハードルを下げつつ、データ非公開に起因する被引用機会の逸失リスク、ないし誤謬を含むナラティブに回収される危険性を周知することで、国家全体としてのDA推進に寄与できるのではないかと考える。ここでデータ授受のエコシステムを共同編集可能な空間として捉え直すとき、各プラットフォームはむしろ、共同で作り、維持し、責任を分担するための装置として再定義できる。そこには、共同体による資源の共有・創造の営みとして、またよりよい世界を構築するためのオルタナティブな公共空間として、「コモンズ」の概念を導入できるだろう⁷。

¹ Europeana, *Europeana Aggregators' Handbook*, Edition 1, May 2010, https://admin.biodiversitylibrary.org/wiki_archive/mainSpace/files/Aggregators%20Handbook_Europeana.pdf, (Accessed 2026-05-06) .

² Capurro, Carlotta., Plets, Gertjan. and Verheul, Jaap., Digital heritage infrastructures as cultural policy instruments: Europeana and the enactment of European citizenship, *International Journal of Cultural Policy*, Vol.30, No.3 (2024), pp.304-324. <https://doi.org/10.1080/10286632.2023.2193401>, (Accessed 2026-05-06) .

³ Holroyd, Carin., Digital content promotion in Japan and South Korea: Government strategies for an emerging economic sector, *Asia & the Pacific Policy Studies*, Vol.6, No.3 (2019), pp.290-307. <https://doi.org/10.1002/app5.277>, (Accessed 2026-05-06) .

⁴ 綿江彰禪「芸術文化政策の計画」、小林真理・阪本崇・友岡邦之 編『文化政策のフロンティア 1 文化政策と評価』東京大学出版会、2026年、pp.105-124.

⁵ Scholz, Henning., and Europeana Foundation, D1.1: Recommendations to Improve Aggregation Infrastructure, Europeana Version 3, Revision 1.0, 3 March 2015, https://pro.europeana.eu/files/Europeana_Professional/Projects/Project_list/Europeana_Version3/Deliverables/EV3%20D1_1%20Aggregation%20Infrastructure.pdf, (Accessed 2026-04-29) .

⁶ 文化庁「資料4 博物館の望ましい基準について」、文化審議会第2期文化施設部会博物館ワーキンググループ(第1回)配布資料、2025年5月20日、p.19, https://www.bunka.go.jp/seisaku/bunkashingikai/bunka_shisetsu/hakubutukan_working/02/01/pdf/94217401_07.pdf, (Accessed 2026-05-06) .

⁷ 西川開『知識コモンズとは何か——パブリックドメインからコミュニティ・ガバナンスへ』勁草書房、2023年。

創作活動のための芸術資源アーカイブは可能か ——京都市立芸術大学・総合基礎実技授業リポジトリ構築の試みから

Is an archive of artistic resources for creative activities possible?
: Insights from an attempt to build a repository for "Sokiso" at Kyoto City
University of Arts

藤岡 洋*
HUZIOKA, Hiroshi

Resume:

京都市立芸術大学には半世紀以上継続されてきた実技授業がある。この授業ではアーカイブも毎年行われ、アーティストが行ってきたアーカイブとしてはおそらく国内最古の部類に属する。その授業アーカイブはコロナ禍や新校舎移転を契機に改めて、現役アーティストが考える現役アーティストのためのアーカイブは可能か、そしてそもそも芸術資源とは何かを考える契機となっている。本発表は、その活動の紹介と、リポジトリシステム開発を通じた資源利活用に関する創作活動の一端を紹介する。

1. はじめに

日本最古の芸術大学とされる京都市立芸術大学・美術学部には、1971年から現在まで続けられている実技授業がある。入学初年度の一回生が半年間、12ある専攻(日本画、油画、彫刻、版画、構想設計、総合デザイン、デザインB、陶磁器、漆工、染織、芸術学、保存修復の計12専攻)の垣根を越えて全員参加が義務づけられている総合基礎実技授業(以下、総基礎)である。かつて、学部・専攻をまたぐ授業は教養課程として全国で行われていたが、総基礎の特長はこれに加え、教員も毎年入れ替わり、課題・成果展までが毎年ゼロから考案される、というポリシーが堅持されてきた点にある。さらに、授業と同時進行で、課題立案から会計書類・作品制作過程・完成作品までもが毎年欠かさずアーカイブされてきた。おそらくアーカイブとしても総基礎は日本美術教育史上における貴重な資料である。

ところが、近年一時的にこのアーカイブ活動に混乱が生じた。コロナ禍である。オンラインリモートでの実技授業も奇怪な状況だったが、全収集資料がクラウドに一気に移行したため、アーカイブ方法論が改めて課題になった。さらに、コロナ禍明け間もない2022年には京都市西京区沓掛から京都駅前の同市右京区への大学移転が決定していたが、このアーカイブには上記事情で管理者がいない。そこで、同大学の芸術資源研究センターが中心となり、アーカイブの救出と安全な移転を援助した。総基礎アーカイブは奇跡的にフォンド(FOND)が担保されてきた。これを踏まえ、可能な限り年度ごとにバンカーズボックスに再付置した上、校舎移転を終えた。

2. 総基礎 DA の現状と課題

移転後には、デジタルアーカイブ(以下、DA)化も再開された。資料整理は創作活動を生業とする作家にとって退屈な作業ではないかと当初

憂慮したが、それは杞憂だった。現場では、例えば会計書類にふと見知らぬ素材(ガンド)に気づき、自ら調査をはじめ、想像力を広げていく傾向があった。この傾向は総基礎資料が芸術資源にもなるのではないかという期待をもたらしたが、一方でアーカイブ活動が認知され、活発になり始めると、別の課題も浮上した。

対象資料の価値に気づくことは、一次資料への回帰を促すことでもある。この回帰自体はアーカイブとしては本懐ですらあるが、ファイン・アートのDA化と比べ、総基礎アーカイブでは原資料の一義性への価値意識が薄れてしまい、原形ならび原秩序の破壊が危ぶまれる事態が何度か起きた。そこで、フォンドを守る三原則(出所、原形、原秩序)を再三確認しつつ、DA化には物理アーカイブ本体に触れることなく、その価値に触れる機会を作って、物的アナログ資料を保護する意味もあることを強調しつつ改めて、DA化の進め方、資源価値の採掘方法を、若手作家らと検討することになった。総基礎アーカイブの課題は「どう保存するか」と同時に「どう活用できるか」を同時進行で問いながらのDA化となった。

この事態は、いわゆる文書DA構築とは少し趣が異なる。文書DAの場合、原資料に確固たる真正性を与えるがゆえに、DAは新たな「発見」を支えると言える。この場合の発見とは「正解を得る」に近い。だが、総基礎DA化では、資料から「問いを拾い(アート思考)」、拾った問いに正面から立ち向かい、そこにいかにか夢中になれるかが課題となった。ここから、芸術資源はDA化に関わる作家にとって「新たな問い」を見出す契機、リポジトリに近いものにしていかねばならないことに気づかされた。

3. 芸術資源としての総基礎リポジトリ

そこで、昨年末から小さな一つの試みを開始した。この試みでは、従来のDA構築、つまり

*ふじおか ひろし(京都大学,京都市立芸術大学)

メタデータを制定し、次にデータを蓄積していく方法をとらない。むしろ、当初想定したメタデータから漏れたものを収める「その他」の情報として取り扱われることが多い「記述 (Description)」から始めてみる、というものである。そのゴールは、データをどう提示するかよりも、リポジトリ構築過程で何が起きるかを記録しつつ、その過程をどう活用ないし共有していくかの具体的な例示と検証である。

このアイデアは同大学の芸術資源研究センター元センター長でもある作家：石原友明からの助言をヒントにしている。石原らは **Kyoto Creative Assemblage** (京都大学一京都市立芸術大学一京都工芸繊維大学による社会人のためのアート実践プログラム 文部科学省「大学等における価値創造人材育成拠点の形成事業」)¹にて、社会人向け芸術プログラムを立案・実践するにあたり、総基礎アーカイブを参考にした。その方法は、アーカイブから課題概要を簡潔にまとめ直し、それを基に複数作家たちが新たな課題形成していく、というものであった。このアイデアを援用したものが今回紹介する**"SEAP (SOKISO Editable Archive Project)"** (仮称) である。

SEAP の表層部分は貧相で、最低限の項目だけ(実施年度、実施期間、課題番号、課題名、概要、素材、担当教員)が並ぶ単なるフォームである。入力情報のほとんどは「概要(Description)」にあてられる。その主たる機能は記述に対し、フォンドの最小単位：アイテムを紐づけることだけである。ただ、紐づけられるアイテム(主に書類や写真)は、文字列をタイトルにした「アルバム」として保存される。アルバムは、当該同一文字列に資料が追加・削除されるたびに随時更新されていき、年度や項目をまたぐものになる。さらに、このアルバムから一つのアイテムを選択すると、アイテムページに偏移する。このページでは、個別アイテムに対する記述が行われる。しかしここでも、その内容も「記述 (Description)」と「タグ」に限定される。このアイテムに付されたタグからは第二のアルバム「タグ・アルバム」が自動生成される。

SEAP の深層部分には二つの実装がある。一つは、執拗な変更履歴保存で、上記メイン記述とタグ記述に変更があった場合には随時、別ドキュメントにログが蓄積される機能である。ログの項目は、変更前と変更後の全記述内容、前後の差分内容、登録者、登録日で、これは差分に注目した手動分析に加え、将来の AI 活用も見込んでいる。二つ目がデータベースの分散実験

に備えた実装である。このシステムは画像フォーマットに avif を採用した。avif は jpg に対して高圧縮(50-90%)かつロスレスで、モダンなブラウザはすでに対応している。tif は DA として別途保存するが、SEAP では avif に xmp 拡張を利用して dbcore:source (フォンド情報)、dbcore:history (変更履歴)などを埋め込む。これにより、従来のデータとデータベースに加え演示プログラムを維持・管理しなければならないスタイルから、画像自体にデータベースをエンベットすることでデータを分散的に共有・管理できないかを試みるための準備ができる。

4. 目標と今後の展望

KCA による総基礎アーカイブの活用に触発されたこの試みは、現役の芸術作家を巻き込みつつ、参加作家の創作活動へ直接・間接的問わず良好なフィードバックを返すことを最終目標としている。着目したのはやはり前述した、アート思考、すなわち「問いを拾う」思考である。例えば、SEAP のアイデアの源泉になった KCA の試み(プログラム「ふくらむ」)に、「平面から立体へと変化する新聞紙の姿を通して、与えられた空間をマンパワーで埋め、出会うことの少ない圧倒的なボリュームを自らの手で作りあげて、”ものをつくること”と”場を共有すること”の関係を考える」という制作課題があった。これは総基礎の1981年課題「夢殿」から着想されたものだが、総基礎資料が、直接流用されるのではなく、芸術資源として、全く新たな課題として活用された好例だと考えられる。ちなみに、KCA は昨年度に満期終了となったが、某企業の社員研修のプログラムの一つに採用され、今年度からは幼児教育プログラムとしての構想発展案もあるようである。

他にも、大学移転初年度の2023年度に総基礎授業を補助し、アーカイブを主導した作家の活動(大阪の空堀地区での展覧会、京都京セラ美術館での個展)などもある。

SEAP はまだ端緒についたばかりである。美術授業記録を研究対象・参照資料になるよう資料化を進めると同時に、現役作家の創作活動への直接的なモチベーションとしてフィードバックすることができないか。こうした課題と展望について、当日議論できればと考えている。

謝辞

本発表は、公益財団法人 小笠原敏晶記念財団「文化・芸術助成(調査・研究等への助成(現代美術分野))」ならびに JSPS 科研費 25K04659, 24K03167 の研究成果の一部である。

¹ Kyoto Creative Assemblage, <https://assemblage.kyoto/>, (Accessed 2026-05-06) .

持続可能な知識記述のための意味的区切り記号 (ArtF 方式)

Sustainable Knowledge Representation through Semantic Delimiters: The ArtF Method

福田博同*

FUKUDA, Hiroatsu

Resume:

筆者は 1990 年に「日本美術シソーラスデータベース(JART-P)」のPC検索を構築した。1991-1994 年科学研究費(DB公開促進費)(代表:眞保亨)で充実化してUTOPIAで公開した¹。2005 年から「意味のある固有番号: Semantic ID (SID)」と、「意味のあるフォルダ: Semantic Folder (SF)」でWeb公開している(JART-P)²。又、2017 年の論文で本文に 8 種の「意味のある 1 文字の区切り記号: Semantic Inline Markup (SIM)」を使用した³。これらSIDやSIMを含む「ArtF技法」はVBAで 8 種の用語集を自動生成できる。また、AIにとって推論不要の理想的なWeb構築方法で、その詳細を紹介する。

1. 「意味ある世界:ArtF 技法」とは

「ArtF」技法とは、「画人の眼で見た、世界知識の意味構造を記述する方法」で、(1) SID の 8 種、(2) SF、(3) SIM の 8 種、(4)教育的・多言語・汎用 VBA、(5) 0.html (AI への指示) の 5 点セットを言う。

1.1 SID とは



図 1 を見ると、通常は蟻が「大きい順に並んでいて、「先頭が 1 番」とする」という固有番号の付与方法である。

図 1 《蟻の行列》

画人はこの図を作品とみて、1. 《作品》(蟻の行列)、2. 作者〔個人〕は不明、3. 【用語】(蟻の行列)、4. 「記事」(若草と枯れ葉の中、蟻が右上から左下に並んでいる)、5. 〈時間〉(春先)、6. 〔団体〕(蟻の集団)、7. {場所}(くさむら)を発見し、8. 『出典』が必要と分析した。このように「意味ある番号」を考案し、「番号+頭文字(4 字以内)+順番」を付与した(例: 作品《山水図》1ssz001、作者〔雪舟〕2ssty001、用語【山水図】3ssz001 等)。

1.2 SF とは

Web 公開の場合、[http://www.組織/意味あるフォルダ\(SF\)/SID.html](http://www.組織/意味あるフォルダ(SF)/SID.html) とすると便利であることを発見した。

1.3 SIM とは

Web 公開にあたり、「ソフトは変わる、国際

規格も HTML→XHTML→HTML5 へと変わった、文字コードも変わった。そこで、本体に 1 文字の区切り記号を組み込めば良い」と考案し、1.2 にある区切り記号八種を考案した。尤も、通例以外に〔作者〕、〈時間〉、{地域}の 3 種を追加しただけである。つまり自然文の一部である。

1.4 教育的・多言語・汎用 VBA とは

DB 構築には Excel VBA で効率化した。そこで、日本人や中国人などの中学生でも分かるよう教育的 VBA にし、変数を多言語に、関数で応答できる汎用 VBA を順次考案した。

1.5 0.html とは

AI は意味を知るため文脈を推論し、質問に答える。0.html に「言語」、「SID の使い方」、「SIM の使い方」、「音楽等他ファイル」、「IME」、などを指示し、入力者の備忘録ともなる。

以上の 5 点セットを筆者(画号:福田伯堂、英文画号 ArtF)は順次考案し、実装した。

2 ArtF 方式実装の簡略史

筆者は 17 歳の時、油絵肖像画を受注し、以降「画人の眼」で現象を分析してきた。1989 年、筑波大学附属図書館員時代に「DDC-NDC 変換対応表: 数学編」をレファレンスツールとして作成した(福田(1989))⁴。

同時に「JART-P」の PC 検索を実装した。1991-1994 年度の科研費を受け、Excel で 1994 年度から「筑波大学学術情報検索システム(UTOPIA)」で公開(福田・五十殿(1997)^{註1})。

2001 年、JADSのWeb委員長として文献情報委

*ふくだ ひろあつ (雪舟国際美術協会会員、跡見学園女子大学文学部名誉教授)

員会作成の文献情報をSFでWeb化し公開した (JADS旧サイト)⁵。

2005年、前年のUTOPIA サービス終了に伴い、JART-PをSFとSIDで公開(Webサイト)^(注1) 2017年、跡見学園女子大学文学部助教授時代にSIMを組み込んだ論文:福田(2017)^(注2)を公開。2026年、複数AI(ChatGTP, Gemini, Grok, Meta, Claude)と協議し、0.htmlを策定中。

3 「教育的・多言語・汎用VBA」



図2 汎用シート 図3 多言語・汎用VBA

図2のようにシートにHTMLが変化しても可能な変数を組み込み、入出力を変数とし、ボタンを押すと指定したフォルダにHTML群を排出。図3のようにVBAも多言語・汎用とした。

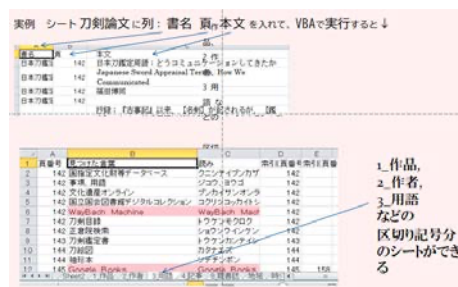


図4 SIM用自動出力VBA

【1】インターネット上の情報源

- 1 福田博同・五十殿利治「美術シソーラスデータベース形成の諸問題」『アート・ドキュメンテーション研究』Nr.6, pp.3-22, 1997, https://doi.org/10.24537/jads.6.0_3, (Accessed 2026-04-23) .
- 2 筑波大学日本美術シソーラスデータベース:絵画編(略称:JART-P) <https://www.tulips.tsukuba.ac.jp/jart/index.html>, (Accessed 2026-04-23) .
- 3 福田博同「刀匠信国系図の総合的研究:山城信国を中心に」『跡見学園女子大学文学部紀要』52号, pp.A79-A107, 2017 <https://atomi.repo.nii.ac.jp/records/835>, (Accessed 2026-04-23) .
- 4 福田博同「DDC-NDCの変換対応表について 分類付与支援データベースの共同作成を目指して」『大学図書館研究 (Journal of College and University Libraries)』Nr.34, pp.80-90, 1989. <https://doi.org/10.20722/jcul.435>, (Accessed 2026-04-23) .
- 5 「JADS」旧Webサイト→「アート・ドキュメンテーション関連文献目録/文献情報委員会(旧クリアリングハウス)編」<https://web.archive.org/web/20021107092335/http://wwwsoc.nii.ac.jp/jads/publica/ref/index.html>, (Accessed 2026-04-23) .

図4はSIMの数だけ、用語集自動出力の例。

4 「ArtF方式」の効能

「教育的・多言語・汎用VBA」以外に、「本文に意味を組み込む方式」故に、次の効能がある。

- 1) 本文のみのマイグレーションでパーマネントリンクが実装できる。
- 2) XMLのように外部のタグをAIが推論する方式と異なり、AIは推論が不要で、トークン数が少なくなり、省電力である。

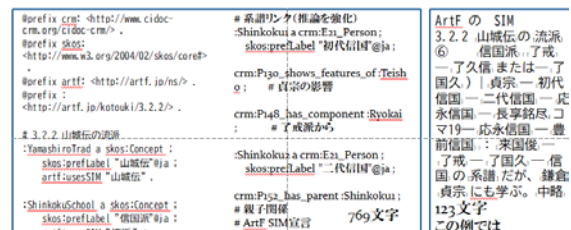


図5 XML(DFR)とArtFの比較

5 今後の課題

- 1) JART-Pのデータ整備と多言語用語集作成
 - 2) JARTの美術工芸分野のDB化
 - 3) 0.htmlの仕様書作成
 - 4) IME並びに、音声IMEの効率化
 - 5) XMLで実装される検索等システムによる、「ArtF + CSV + Python + Streamlit」の試作と実演
- 以上が考えられる。

文化財レスキュー日報の知識構造化に関する基礎的研究 ——日報記録の再利用に向けた構造化データベース設計の検討

A Preliminary Study on Knowledge Structuring of Daily Reports from Cultural Heritage Salvage Operations: Designing a Structured Database for the Reuse of Daily Report Records

三谷直哉*、上楯英之*

MITANI Naoya, UESUGI Hideyuki

Resume:

本研究は、令和6年能登半島地震における文化財レスキュー事業の日報を対象に、非定型な記述を「判断を伴う対応単位」として整理するデータ構造を設計するものである。試行的適用を通じて、日報記録を過去の類似事例として検索・参照できる形に整理するうえでの有効性と課題を検討する。

1. 研究背景と目的

令和6年能登半島地震では、被災した建物から文化財等を救出し、安全な場所で一時保管を行う被災文化財等救援事業（文化財レスキュー事業）が実施されてきた。事業の日々の活動は日報として記録されており、そこには作業内容だけでなく、現場で生じた課題や対応の判断も含まれている。したがって、日報は活動記録であると同時に、現場で形成された経験知を含む資料である。

一方で、日報の多くは自由記述を含む非定型な記録であり、原文のままでは個別事例や過去の判断を検索・参照し、再利用することが容易ではない。筆者らはこれまで、令和6年能登半島地震における文化財レスキュー事業の日報を対象として、計量的分析¹および因子分析²を行い、日報群に内在する活動構造の把握を試みてきた。これらの分析は事業全体の傾向把握に有効であるが、個別事例の判断理由や対応結果を再利用するには、日報記述をより細かな知識単位として整理する必要がある。

そこで本研究では、日報の記述を再利用可能な知識単位として扱うためのデータ構造を設計し、実際の日報記述への試行的適用を通じて、その妥当性と課題を検討する。

2. 対象資料と方法

対象資料は、令和6年能登半島地震文化財レスキュー事業の日報である。本研究では、日報に記載された活動を単なる行動記録ではなく、現場条

件に応じて選択された「判断を伴う対応」として捉える。

具体的には、日報記述から、出典、現場、対象、被害、作業テーマ、行動、判断理由、結果に関する情報要素を抽出し、再利用可能な知識単位として扱うためのデータ構造を設計した。さらに、実際の日報記述に試行的に適用し、抽出可能な情報、解釈を要する情報、欠落しやすい情報を整理した。

なお、本設計は、これまでの計量的分析および因子分析の結果を前提としている。頻出語彙や日報中の選択肢は、「対象分類」「対象材質」「被害」「作業テーマ」等の項目設定に反映した。また、因子分析では個別事例の判断理由や結果までは十分に把握できないため、本設計では「理由」および「結果」を独立項目として設けた。

3. 知識単位のデータ構造設計

本研究では、1レコードを「1つの判断を伴う対応単位」と定義した。1件の日報に複数の対応が記述されている場合には、必要に応じて複数のレコードに分割する。また、構造化によって文脈や解釈の根拠が失われないよう、日報の原文断片を保持し、各項目と対応づける設計とした。設計したデータ構造を表1に示す。主な項目は、出典、現場、対象、被害、作業、行動、理由、結果から構成される。

本設計の特徴は、第一に、出典情報と原文断片を保持し、構造化後も原記録に立ち戻れる点である。第二に、案件番号を保持し、関連資料との連

*みに なおや、うえすぎ ひでゆき（文化財防災センター）

項目名	内容定義
レコード番号	レコードを一意に識別する ID
出典 日報 ID	日報 ID-[連番]
出典 日報作成日	日報の作成日付
出典 日報記述者	日報の記述者
出典 原文	日報の原文断片
案件番号	案件番号
現場位置	実際に作業を実施した場所。
対象分類	対象文化財の分類。日報中の選択肢を用いる。
対象材質	対象文化財の材質。日報中の選択肢を用いる。
対象数量	対象文化財の数量。
被害	対象文化財の被害。日報中の選択肢を用いる。
作業テーマ	作業概要。日報中の選択肢を用いる。その他の場合は自由記述。
行動	より詳細な対応内容。
理由フラグ	1:明示、2:推定、3:不明
理由	意思決定の理由
結果フラグ	1:完了、2:未完了(途中)、3:保留、4:未実施
結果	行動の結果。あれば残課題。

表 1 日報データ構造

携を想定した点である。第三に、判断理由と結果を独立した項目として扱う点である。特に判断理由については、日報原文上に明示される場合・記述内容から推定される場合・不明である場合を区別する。また、結果についても、完了・未完了・保留・未実施を区別し、対応後の状態や残された課題を記録できるようにした。

4. 試行的適用

設計したデータ構造を日報 5 件に試行的に適用し、10 件のレコードに分割した。対象には、理由が未記載のもの、1 通の日報に複数の知識単位が含まれるもの、1 日で作業が完了せず継続しているものなど、記述内容にバリエーションを持たせて選定した。また、抽出作業は 2 名で行い、抽出結果を相互確認した。その結果、以下の点が確認された。

1) 対象、被害、作業テーマ、行動は抽出が容易

対象文化財の分類・材質・数量、作業場所、作業内容は日報中に具体的に記載されている場合

が多く、構造化しやすい傾向があった。

2) 判断理由、結果は明示されない場合がある

日報では「何をしたか」は記載されていても、「なぜその対応を選択したか」や「その結果どうなったか」が明記されていない場合があった。そのため、理由や結果については、原文に明示された情報と、分析者が記述内容から推定した情報を区別して記録する必要がある。

3) 知識単位の分割には判断を要する

1 つの日報に複数の案件番号、対象文化財、対応が含まれる場合、どの範囲を 1 つの知識単位とみなすかが課題となった。また、案件番号が記載されていない日報や、対象、現場が明確に特定できない記述も存在するため、不明値を許容する設計が不可欠である。

以上から、本設計により日報記述を一定程度データベース化することは可能であると考えられる。ただし、整理される情報は日報に記載された事例であり、それ自体が直ちに「正解」や「推奨手順」を意味するものではない。したがって、日報の知識構造化は、過去の類似事例を参照し、対応方針を検討する際の判断材料を整える基盤として位置づける必要がある。

5. まとめと今後の課題

本研究で設計したデータ構造は、非定型な日報記述を「判断を伴う対応単位」に分解し、複数の現場や対象が混在する記述を個別事例として整理できる点に有効性がある。

一方で、知識単位の粒度設定、原文忠実性と解釈のバランス、判断理由・結果の欠落、不明値の扱いは課題である。今後は、案件番号を介した関連資料等との連携や、対応単位ごとに記録しやすいフォーム設計を検討する。

以上により、日報記録を条件と判断・対応・結果の関係を参照できる判断支援型の知識構造へ発展させることを目指す。

1 三谷直哉「令和 6 年能登半島地震文化財レスキュー事業日報の計量的分析」,アート・ドキュメンテーション学会第 36 回(2025)年次大会

2 三谷直哉「文化財レスキュー事業日報の因子分析：令和 6 年能登地震と東日本大震災の構造的比較」,アート・ドキュメンテーション学会第 18 回(2025)秋季研究集会

〈たてもの〉文化情報の「教材化」方法論

Methodology for Developing Educational Materials from Architectural Cultural Information

大井将生*, 小澤翔瑛*, 水谷一路*, 星初夏紀*, 白井麻美**

OI Masao, KOZAWA Shoei, MIZUTANI Ichiro, HOSHI Hanaki, SHIRAI Asami

Resume:

本研究では、多様な形態の文化資源を学校授業の「問い」へ翻訳するプロセスを、現場で再現可能な方法論として開発している。本発表では、江戸東京たてもの園において「S×UKILAM（スキラム）連携」のスキーマを応用して実践した「教材化」ワークショップを対象に、①文化施設でのフィールド観察とデジタルコンテンツを併用して〈問いの創発〉を促すメカニズム、②教育メタデータ・二次利用条件・検索支援といった実務課題が協働の場で可視化される過程について述べる。その結果、多様な観点でたてもの文化情報を活用したユニークな教材が共創された。今後は、多様な文化資源を教材化する際のワークフローを洗練させるため、より多くの機関での実践展開と事例の共有が望まれる。

1. 序論

1.1 社会的背景

デジタル技術の進展は、文化施設のあり方を大きく変えつつある。令和4年の博物館法改正では、デジタルアーカイブ（以下 DA）の作成と公開が博物館事業として定義・明文化され、資料の公共化と多様な創造的活動への資料活用を促進することが提示された¹。これにより、文化施設が地理的・時間的制約を越えて創造的活動や地域交流活動を支え、学校教育や生涯学習との接続可能性を大きく広げることが期待されている。

1.2 問題の所在

かねてより教育現場では、「面白い教材を作成したいが、活用できる素材が見つからない」という課題があった。他方、文化資源を所有する施設側には、「自館には魅力的な資料があるにも関わらず、教育場面で活用されない」という悩みがあった。このように、多くの文化資源は、資料所蔵者と活用者を結ぶ連携の場や仕組みが整備されてこなかったため、その教育活用の潜在価値が認識されながらも、実際の実践には至らないという構造的な課題が継続していた。とりわけ、建築物や町並みといった空間的な文化資源は、テキストや絵画等と比較すると教育活用の方法論が十分に検討されてこなかった。

1.3 本研究の目的

そこで本研究では、文化施設、とりわけ建築

物や町並みを実際の教育現場で活用可能な形で「教材化」することを目的とする。

2. 先行研究

COVID-19 のパンデミック以降、博物館等が所有する文化資源を Web 上で教育活用する実践が増加している。佐久間ら（2022）は、大阪市立自然史博物館において、教育活動の類型に応じてライブ配信とアーカイブ化を実施した²。伊藤ら（2024）は、国立科学博物館タイプ標本データベースへの国際的に相互運用性の高い枠組みを導入し、機関横断的な資料活用の可能性を示した³。これらの実践は、DA を「見せる」から「使える」段階へと押し上げた点に貢献がある。今後は、そうした知見や技術的な利点を活かした「データ」のネットワークに加え、学校教員などの活用者と資料所蔵機関が、互いの要望や悩みを共有しながら協働・共創可能な対話・議論の場を設計し、「人」のネットワークを構築することが望まれる。

3. 本研究のアプローチ

3.1 手法

そこで本研究では、学校関係者と資料所蔵機関の関係者が協働し、多様な文化資源を「教材化」する「S×UKILAM（スキラム）連携」⁴のスキーマを援用し、ワークショップを開催する。

* おおい まさお, こざわ しょうえい, みずたに いちろ, ほし はなき (同志社大学 文化情報学部)

** しらい あさみ (東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京)

3.2 対象

東京都歴史文化財団の江戸東京たてもの園を会場とし、当園が持つ実空間とデジタル文化情報を組み合わせて「教材化」を行う。また、学芸員と学校教員、DA について専門的に学んでいる大学生、そのほか本ワークショップに関心のある一般参加者を対象とする。

3.3 ワークショップデザイン

江戸東京たてもの園での「教材化」ワークショップは、以下の流れで実施する。

- 1) 文化資源の「教材化」について、概要・方法論の説明、先行事例の紹介
- 2) たてもの園内を散策、フィールドワーク
- 3) 2グループ*に分かれて「教材化」ワーク
*各グループに学芸員と小学校・中学校の教員、大学生、一般参加者が混在となるように配置
- 4) 検討・構想した教材案を全体で発表、共有

4. 結果と考察

4.1 ワークショップ

「教材化」ワークショップは、「江戸東京たてもの園でタイムスリップ授業づくり！」と銘打ち、2025年8月23日(土)に開催した。参加者は、学校教員や学芸員、大学生、自治体職員など多様な属性の19名で構成された。

参加者は、1時間半ほど園内を見学し、写真撮影や学芸員との対話を通じて教材の素材を収集し、アイデアを練った。その後、2グループに分かれ、園内散策で得た素材にデジタルコンテンツ(たてもの園ナビやデジ×たて図鑑)を組み合わせ、議論を行いながら教材が制作された。

4.2 教材

制作された教材のうち、仕上げ・メタデータ付

与まで実施できたものを S×UKILAM 教材アーカイブで公開した⁵。「移築」をテーマにした建物文化のダイナミズムに注目した教材や「化粧」など展示されている建物の中身・営みに注目した教材、建物そのものではなく学芸員というそこで働く「人」に注目した教材、校外学習や歴史の授業と連動させた教材など、テキスト資料だけでは作れない、実空間で対話的なフィールドワークを媒介としたことで生まれたユニークな視点で「問い」を創発する教材が制作された。

4.3 アンケート

参加者への事後アンケートでは、参加動機や期待に対して肯定的な回答が多数を占めた。また、「デジタル資料の活用で一番の悩み事は？」という質問に対しては「検索の仕方がまだよくわからない」という回答があった。多忙を極める日々の業務において授業準備は時間的制約や負担が大きく、学年・教科・単元への適合を短時間で判断する必要がある。そのため、探索コストの高さは、「存在しても使われない」状態を引き起こす要因となり得ることを考慮したメタデータ整備や UI デザインが必要になると考えられる。

5. 課題と展望

本研究を通して明らかになった課題としては、学校教員の参画が十分でないこと、「教材化」ワークフローの簡素化、より多くの機関での実践展開と事例の蓄積・共有が挙げられる。以上をふまえ、今後は他機関でのワークショップ実践を重ね、扱う文化資源の特性を活かした方法論を深化させ、文化資源の教育活用に資する「人」と「データ」の拡張を図る。

¹ 文化庁企画調整課。博物館施策の動向について。 https://www.mext.go.jp/content/20251106-mxt_chisui02-000045724_6.pdf, (参照 2026-05-05)。

² 佐久間大輔, 石田惣, 石田陽子, 釋知恵子, 山中亜希子。COVID-19 状況下での教育活動へのデジタル映像配信活用とその課題: 大阪市立自然博物館での実践例から。デジタルアーカイブ学会。2022, Vol.6, No.2, p.e1-e10。

³ 伊藤美菜子, 太田藍乃, 柿添翔太郎, 海老原淳, 倉島治, 井上侑哉, 井手竜也, 神保宇嗣。国立科学博物館タイプ標本データベースへの IIIF 公開機能導入と実践: 自然史分野における IIIF 公開の展望と課題。デジタルアーカイブ学会。2024, Vol.8, No.S2, p.s119-s122。

⁴ 大井将生, 渡邊英徳: 「S×UKILAM (スキラム) 連携: 多様な資料を学校教育で活用するための「人」と「データ」のネットワーク構築」; デジタルアーカイブ学会誌, 2022, Vol.6, No.s3, p.s214-s217。

⁵ 大井将生。S×UKILAM スキラム連携: 多様な資料を活用した教材アーカイブ。 <https://adeac.jp/adeac-lab/top/SxUKILAM/index.html>, (参照 2026-05-05)。

パール下中記念館資料のアーカイブ

Pal-Shimonaka Memorial Hall Archives

栗原 祐司*

KURIHARA, Yuji

Resume:

パール下中記念館（神奈川県箱根町）は、極東国際軍事裁判で判事を務めたラダ・ビノード・パール博士と、平凡社の創業者である下中彌三郎氏の功績を称える施設であり、パール博士の書簡や原稿、下中彌三郎氏の遺品、東京裁判関連資料などを収蔵・展示している。しかしながら、職員が常駐しておらず、老朽化が著しい。このため、同館の資料をアーカイブするとともに、より適切な環境下に移動し、保存することが急務とされている状況を報告し、今後の在り方を考察する。

1. パール下中記念館について

パール下中記念館は、芦ノ湖の湖畔にひっそりと佇む。同館は、極東国際軍事裁判（東京裁判）で判事を務め、同裁判が連合国による「勝者の裁き」であると批判し、日本人の被告全員の無罪を主張したインド出身のラダ・ビノード・パール博士（Dr. Radhabinod Pal ; 1886-1867）と、株式会社平凡社の創業者で、教育運動、労働運動、農民運動、平和運動の指導者としても知られる下中彌三郎氏（1878-1961）の功績を称える施設である。

下中彌三郎氏は、1952（昭和 27）年に自らが準備委員長として広島で開催した国際会議「世界連邦アジア会議（Asian Congress for World Federation）」にパール博士を私費で招へいし、以後、二人は世界の正義と平和のために尽力しようと約束した。1967（昭和 42）年に、生前二人がその風景を愛でた芦ノ湖畔に偉大な業績を讃える記念碑が建立された。また、パール博士の遺族から外務省を通じて日本に遺品を贈りたいとの依頼があり、世界平和を求めるなかで出会った二人の精神を記念するための施設として 1974（昭和 49）年に記念碑の近くにパール下中記念館が開館した。館内には、パール博士の書簡や原稿、下中氏の遺品、東京裁判関連資料などを収蔵・展示しており、下中氏の遺志を継承するために 1962（昭和 37）年に設立された財団法人下中記念財団（2012 年に公益認定）によって維持管理されている。

同館が所蔵する資料でとりわけ貴重なのは、下

中氏がジョン・F・ケネディ大統領に送った世界平和に関する書簡に対する返事で、そこには友情への感謝と、下中氏が目指した「世界共同体」へのケネディ自身の共感が述べられている。（原本は下中記念財団で保管）

なお、同館に隣接して「出版平和堂」があり、出版関連 13 維持団体等によって維持・運営がなされている。堂内には、日本の出版界に多大な貢献のあった物故者の名前と功績が刻まれた記銘板が掲げられている。

ちなみに、パール博士については、靖国神社や京都霊山護国神社に顕彰碑が建てられている。

2. パール下中記念館の現状と課題

2.1 劣悪な保存・展示環境

現在、パール下中記念館には職員が常駐しておらず、下中記念財団のホームページ¹には「現在、見学の受付は行っておりません。」と記され、事前予約のみの不定期開館となっている。アクセスも良好ではないため、年間数人程度の来館者にとどまっている。また、空調設備が常時稼働していないため、温湿度管理ができていない。展示自体は、1974 年の開館以降キャプションを含め大きくは更新されていないと思われ、半世紀を経て資料の劣化が著しい。例えば、東京裁判の際にパール博士が法廷で使用していたという椅子は生地が剥がれており、パール博士が着用していた法衣や礼服は褪色している。ノート等の書類も粉状に劣化しており、展示ケースの随所にカビや害虫が散見される状況にある。さらに、水道・下水道がないため、館内にトイレ設備等もない。

*くりはら ゆうじ（国立科学博物館）

2.2 不十分なアーカイブ

下中記念財団では、随時館内の清掃作業を行うとともに、収蔵・展示されている資料の目録化を随時進めており、画像データのアーカイブも行っているが、組織的な体制が不十分な状態にあり、これらのデータは一部「非公開テスト版」として公開されるにとどまっている²。

2.3 資料保存に関する研究の不在

もとより下中記念財団には学芸員やアーキビスト等の専門家が配置されていない。一方、下中彌三郎氏やパール博士、あるいは極東国際軍事裁判等の研究者にとっては、同館が有するコレクションは貴重な一次資料である。例えば中島岳志・東京科学大学教授は、著書『下中彌三郎：アジア主義から世界連邦運動へ』（平凡社 2015）のあとがきで、パール下中記念館を「利用し、埋もれた史料の「発掘」に努めた。」と述べている。2007年に中島が「パール判決書は日本無罪論ではない」³と批判し、小林よしのり氏との論争が長期間続いたが、小林氏もまた同館を訪問し、『ゴーマニズム宣言 SPECIAL「パール真論」』（小学館 2008）で同館を描いている。

しかしながら、これらの研究のために調査・閲覧された資料について、その保存についての研究や取組は、これまで不在であった。2.1で述べた劣悪な保存環境を考えれば、現状を改善することは急務と言える。

3. 今後の在り方

3.1 パール下中記念館からの資料レスキュー

下中記念財団及び平凡社の関係者にヒアリングした限りでは、パール下中記念館の課題は認識しているものの、改修する財政的な余裕はなく、また、別途移転することも現実的ではない。現在地には、前述のとおり記念碑及び出版平和堂があることから、建物はそのまま残すとしても、館内の資料は、より良好な環境に移動することが望まれる。事実上の「資料レスキュー」を行うことに

より、資料のさらなる劣化を防止し、後世に継承していくための対応策が求められよう。そのため下中記念財団及び平凡社としても、広く専門家の協力を求めており、将来的にはこれらの資料を研究する大学や研究機関等に寄託することも考慮に入れる必要があるだろう。

3.2 資料のデジタル・アーカイブ及び公開

下中記念財団によって随時進められている資料の目録化や画像データのアーカイブを、研究機関等と連携・協力することにより、組織的な資料のデジタル・アーカイブ化を進めることが求められる。資料の展示施設が確保できるまでは、これらのデータを公開することも必要であろう。

3.3 新たな収蔵・展示施設の設置

パール下中記念館に代わる新たな収蔵・展示施設を設置することは容易ではない。しかしながら貴重なコレクションであり、机や椅子、法服等の立体物もあることから、下中記念財団及び平凡社としても、これらを良好な環境下で収蔵・展示する方策を検討中である。これらの資料を研究する大学や研究機関、博物館等に寄託することも選択肢の一つとして考慮に入れておく必要があると思われる。

3.4 資料の再評価

パール下中記念館が所蔵するコレクションは、昭和史の研究のみならず、世界各地で紛争が続く現代において平和な社会を構築する上で極めて重要な資料であると考えられる。

パール下中記念館の資料は、単なる財団、企業または個人所有のコレクションにとどまらない文化遺産としての価値を有している。パール判決論争⁴のような議論や世界連邦運動等にとどまらず、改めてその価値を再評価し、歴史資料としての文化財登録や指定をも視野に入れた調査研究を行い、その保存や展示の在り方を引き続き検討していくことが求められる。

1 公益財団法人下中記念財団, <https://www.shimonaka.or.jp/pal-memorial-hall/> (Accessed 2026-05-06)

2 公益財団法人下中記念財団, <https://www.shimonaka.or.jp/pal-memorial-hall-test/> (Accessed 2026-05-06)

3 中島岳志『パール判事 東京裁判批判と絶対平和主義』（白水社 2007）

なお、本書の表紙には、パール下中記念館所蔵のパール博士の椅子の写真が掲載されている。

4 中島岳志と小林よしのりとの論争のほか、西部邁や牛村圭、八木秀次等も論争を行っている。

絵本原画展の記録と分類 -展示リスト作成による研究方法の検討-

山内 棕子

(東京大学大学院人文社会系研究科
文化資源学研究専攻博士課程・
日本学術振興会特別研究員 DC2)

本発表は、日本国内で開催された絵本原画展をリスト化するにあたり、資料収集の仕方や記録方法、そして分類について検討するものである。

発表者はこれまでに、2024年以降の国内の絵本原画展の調査をしているほか、特にこれまで詳細な検討は進められてこなかった2000年以前の絵本原画展の動向をたどり、体系的なリスト化を目指している。

現状、美術館や百貨店における開催記録をはじめ、書店やギャラリーにおける展覧会についても可能な限り調査をおこなう方針をとっている。その成果の一部は、絵本学会の公式ホームページ上でPDFファイルとして公開されている。一方でどのような目的で本リストが活用されるか、また原画展の需要が拡大し年々開催数が増加するなかで網羅的な情報収集は可能なのか等、検討すべき課題は残されたままである。

リストの公開にあたり、アクセシビリティが確保されること、そしてユーザビリティを向上させることは重要である。本発表では、開催地や会場種別や規模、企画テーマ、入場料などの観点から分類の妥当性を検討し、よりよいデータ活用のあり方について議論していきたい。

山内 棕子 (やまうち りょうこ)

東京藝術大学美術学部芸術学科卒業後、東京大学大学院人文社会系研究科文化資源学研究専攻修士課程修了。現在は、絵本作家の制作活動を起点として、「原画」と「展示空間」をめぐる視覚表現史の動向をたどりながら、絵本のメディア特性がいかに形成されてきたかを研究している。特に、絵本というメディアを作家が選択した背景、そして絵本がいかなる視覚文化を可能にするかに関心を持っている。

平沢大暲—『軍用ジャンク』 (未発表・個人蔵)ら軍命作品に みる画家の仕事

矢部恵子

(フリーランス)

筆者は、当学会の2024年年次大会での研究発表(タイトル:「平沢貞通——4つの雅号をもつ画家の矜持」)、2025年年次大会でのポスター発表(タイトル:「平沢『光彩』の仕事—光の差さない画室から生まれた『コレクション』を辿って」)を通じて、生涯に4つの雅号(「不朽」・「三味二」/萌芽期、「大暲」/大成期、「光彩」/獄中期)をもつ画家・平沢貞通の画業と現存する資料について調査研究の一部を明らかにした。56歳にして圀圍の身となった獄中期「光彩」の時代における絵画資料の多くが個人蔵であり、未発表・未整理のものが少なくないことを明らかにした。

本発表では、軍命で制作された「軍用ジャンク」(未発表・個人蔵、雅号「大暲」)に光を充てる。生来、画家が得意とした「地平線」の画題とは異なり、公式の展覧会への出展記録にもない。「テンペラ画会」会長、無鑑査の立場にあり、従軍画家とは程遠かったはずの平沢が、なぜ、「軍用ジャンク」を描いたのか。遺された資料をもとに、制作当時の時代背景と画家の仕事に思いを馳せたい。

矢部 恵子 (やべ けいこ)

2025年3月京都芸術大学大学院芸術研究科芸術専攻博士後期課程単位修得満期退学。2022年に「平沢貞通生誕130年・没後35年記念絵画展—『不朽』『三味二』『大暲』『光彩』—画家・平沢貞通の生涯—」開催。現在も資料調査を通じて画家の再評価に臨む。2025年度より平沢貞通の功績を遺していく手立てとして北海道芸術文化アーカイブセンター(ACA)との連携でアーカイブ化を進める事業を展開中。

東京芸術劇場の公演資料等 デジタルアーカイブプロジェクト

赤間 亮、平野 理紗子

(立命館大学アート・リサーチセンター)

福井 久美子 (アーツカウンシル東京)

東京芸術劇場は、音楽・演劇・舞踊等の芸術文化振興と国際交流を目的として 1990 年に開館し、創造発信型劇場として多様な舞台芸術活動を展開してきた。2024 年からは、立命館大学アート・リサーチセンターと連携し、公演資料等を持続的にデジタル化・管理・運用するためのデジタルアーカイブプロジェクトを推進している。

本プロジェクトでは、舞台芸術アーカイブの基本理念として、「モノ（資料）」「コト（事実）」「ヒト（関係者）」の三要素のうち、上演という「コト」を中心に実施している。データベースは、上演資料、写真、映像、冊子、業務文書等を上演 ID で連携する多層的構造とし、人物名や作品・楽曲のレファレンスデータベースとも接続することで、高い検索性と拡張性を実現していく。また、公開・非公開設定や権限管理にも柔軟に対応し、劇場業務とアーカイブ活動の連携による DX 推進も視野に入れる。さらに、将来的な現物資料の保存環境整備も目指す。本発表では、東京芸術劇場における持続可能なデジタルアーカイブ構築の方法と実践プロセスについて報告する。

赤間 亮 (あかま りょう)

立命館大学デザイン・アート学部教授

早稲田大学演劇博物館助手、立命館大学文学部専任講師、立命館大学先端総合学術研究科教授、立命館大学文学部教授を経て、2026 年 4 月から立命館大学デザイン・アート学部教授。演劇博物館で演劇資料デジタルアーカイブを実践。1998 年立命館大学アート・リサーチセンターの設立に関わり、2003 年からは、海外の博物館が所蔵する日本文化資源のデジタル化にも邁進。立命館 ARC では、文科省「日本文化資源デジタル・アーカイブ国際共同研究拠点」(ARC-iJAC)の運営を行っている。

平野 理紗子 (ひらの りさこ)

立命館大学衣笠総合研究機構立命館大学アート・リサーチセンター研究員

立命館大学文学部国際文化学域文化芸術専攻卒業。立命館大学大学院文学研究科文化情報学専修博士前期課程修了。同研究科博士後期課程単位取得満期退学。大学院在学時から赤間研究室にて国内外の博物館・美術館等が所蔵する日本文化資源のデジタル化プロジェクトに携わり、2025 年からは立命館大学アート・リサーチセンター所属研究員として専門的にデジタルアーカイブ業務に従事している。

福井 久美子 (ふくい くみこ)

東京都歴史文化財団アーツカウンシル東京

多摩美術大学大学院情報デザイン領域、筑波大学大学院情報学学位プログラム修了。印刷会社の IT 部門にて、印刷物、ウェブ、TV などのメディアに対応したコンテンツを制作。2012 年からギャラリーや博物館に勤務し、展覧会の企画から書籍の編集まで幅広い業務に携わる。現在、都立文化施設が有する収蔵品等の文化資源をデジタル化し、多様な形態での鑑賞体験を提供する「TOKYO スマート・カルチャー・プロジェクト」を統括している。

専門図書館の DX を加速させる 「ネオシリウス・ラボ」と 「INFOLIB」の活用

日本事務器株式会社
東京都渋谷区本町 3-12-1
住友不動産西新宿ビル 6 号館

- ・クラウド型専門図書館向け図書館システム
「ネオシリウス・ラボ」
<https://www.njc.co.jp/neocilius/lp/>
- ・クラウド型デジタルアーカイブシステム
「INFOLIB」
<https://www.njc.co.jp/infolib/>

近年、専門図書館には情報の蓄積に加え、デジタル化による利活用促進と業務の高度化が求められている。本発表では、これらの課題を解決する 2 つのクラウド型システムを紹介する。

「ネオシリウス・ラボ」は、専門図書館に特化した図書館システムで、シンプルな操作性で日常業務を効率化し、ポータル機能を通じて研究者や職員へ最適な情報ナビゲートを実現する。一方、「INFOLIB」は、画像や動画等、多様な資料の公開・管理を容易にする。Excel ベースの目録設計や標準プロトコル対応により、高度な専門知識なしで柔軟なアーカイブ構築が可能である。

これらクラウド基盤の活用は、システム管理の負担を軽減し、図書館が本来担うべき専門的な研究支援や知の継承に専念できる環境を提供する。

渡辺 哲成 (わたなべ てつなり)

日本事務器株式会社 事業戦略本部 パーチカルソリューション企画部プロダクトマネージャー (図書館・文教プロダクト)

ポーラ文化研究所 50 年の活動と デジタルでの情報発信の取り組み

ポーラ文化研究所
東京都港区南青山 2-5-17
ポーラ青山ビルディング 1F

- ・ポーラ文化研究所ウェブサイト
<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/>
- ・化粧文化ギャラリー
<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/gallery/>
- ・デジタルミュージアム
<https://www.cosmetic-culture.po-holdings.co.jp/digitalmuseum/>
- ・SNS
https://www.instagram.com/pola_cosmeticculture/
https://x.com/POLA_bunken/

ポーラ文化研究所は、化粧を学術的に探究することを目的として 1976 年 5 月 15 日に設立した。以来、化粧を人々の営みの中で培われてきた大切な文化であるにとらえ、化粧文化に関する【収集保存、調査研究、公開普及】に継続的に取り組んできた。公開普及活動においては、書籍の出版や展覧会などに加え、2000 年代からはウェブサイトや SNS を通じた発信を実施してきた。2024 年には、東京都港区南青山に活動拠点を移すとともに化粧文化ギャラリーを開設。また、約 1,000 点の所蔵品を紹介する「デジタルミュージアム」を公開。2026 年 5 月にはオンライン版研究誌『化粧文化研究報告』を創刊するなど、デジタルでも、より広く化粧文化の世界を社会へ発信し続けている。

立川 有理子 (たちかわ ゆりこ)

2006 年よりポーラ文化研究所にて文化情報誌『化粧文化 PLUS』の編集やウェブサイトの企画運営など、化粧文化の情報発信を担当。共著『おしゃれ文化史-飛鳥時代から江戸時代まで』（秀明大学出版会発行）。司書

第 19 回 秋季研究集会

本年 2026 年度第 19 回秋季研究集会は、12 月 6 日（日）での開催を予定しています。本年度も昨年に引き続き、会員以外も含めた若手研究者や新しいプロジェクトに挑戦する方々からの「萌芽研究発表」も設けます。萌芽研究では、そのテーマに関連する経験豊富な会員からの講評・助言、参加者との討議を行います。加えて、優れた発表に萌芽賞を授与いたします。

ぜひご予定おきください。

■秋季研究集会

日時 : 2026 年 12 月 6 日（日）

場所 : 調整中

『アート・ドキュメンテーション研究』 第 35 号 原稿募集

『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会では、第 35 号（2027 年 5 月刊行予定）に掲載する原稿を募集しています。

研究論文は査読対象となりますが、その他に研究ノート、事例報告、資料紹介、書評なども歓迎いたします。詳しくは JADS ウェブサイトの投稿規定をご覧ください。

投稿をお考えの方は、原稿の仮題と概要（400 字程度）、および原稿種別（投稿規定 3. を参照）を、エントリー期限までに、編集委員会宛にご連絡ください。

エントリーを行いました方には、原稿執筆用のテンプレートをお送りしますので、これに沿ってのご執筆をお願いいたします。

JADS 会員の皆様からの、ふるってのご投稿をお待ちいたしております。

エントリー期限 : 2026 年 9 月 30 日
原稿提出期限 : 2026 年 12 月 15 日
査読・編集 : 2026 年 12 月～2027 年 5 月

投稿規定・執筆要領の掲載先 : <http://www.jads.org/pub/pub.html>

連絡先 : 『アート・ドキュメンテーション研究』編集委員会
kenkyu_editor@jads.org

アート・ドキュメンテーション学会

刊行物販売のお知らせ

2026/6

本学会刊行物をご購入いただけます。お申し込みは毎日学術フォーラムまで（別途送料がかかります）。

◆刊行物バックナンバー

『アート・ドキュメンテーション研究』 第33号	(2025年5月刊)	定価¥3,000+税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第32号	(2024年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第31号	(2023年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第30号	(2022年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第29号	(2021年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第27・28号	(2020年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第26号	(2019年5月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第25号	(2018年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第24号	(2017年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第23号	(2016年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第22号	(2015年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第21号	(2014年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第20号	(2013年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第19号	(2012年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第18号	(2011年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第17号	(2010年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第16号	(2009年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第15号	(2008年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第14号	(2007年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第13号	(2006年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第12号	(2005年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第11号	(2004年3月刊)	定価¥1,500 ¥3,000 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第9号	(2001年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第8号	(2000年7月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第7号	(1999年9月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 +税
『アート・ドキュメンテーション研究』 第6号	(1997年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第5号	(1996年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『アート・ドキュメンテーション研究』 第4号	(1995年8月刊)	定価¥1,250 ¥2,500 (税込)
『国際シンポジウム：東アジアにおける美術・文化財情報のネットワーク化を考える：報告書』	(2005年1月刊)	定価¥1,000 (税込)
『arsの現場とツールの諸相Ⅱ』(ars-WG叢書・2)	(2000年3月刊)	定価¥1,000 (税込)
『報告書：シンポジウム：フランスにおける美術情報の普及と専門教育』	(1998年3月刊)	定価¥1,500+税
『美術情報と図書館：報告書』	(1995年3月刊)	定価¥2,500 (税込)

◆お問合せ・お申し込み

株式会社 毎日学術フォーラム

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋 1-1-1 パレスサイドビル

Tel : 03-6636-0956 (販売直通) Fax : 03-6267-4555 E-mail: maf-sales@mynavi.jp

お申し込み方法 : <https://maf.mynavi.jp/sales/>

■アート・ドキュメンテーション学会とは

アート・ドキュメンテーション学会は、ひろく芸術一般に関する資料を記録・管理・情報化する方法論の研究と、その実践的運用の追究に携わっています。1989年4月に、美術館/博物館、図書館、アーカイブ、芸術関連機関の新しい連携をめざし、わが国および国際間における文化的感性と芸術関連情報の創発的な協働のために開設されました。

さまざまな出来事や資料を記録・共有する作業は社会生活の根本をなす人間の営みですが、その理念や技術は現代の情報社会で急速に変容し、飛躍的に発展しています。芸術関連のドキュメントの持つ豊かな可能性は、研究・教育機関のみならず、地域のコミュニティーや個人的な活動でも開発される局面にあるでしょう。

本学会には、図書館司書、学芸員、アーキヴィスト、情報科学研究者、美術史・文学史・音楽史・メディア史・文化史・自然史研究者など、約300名・機関の正会員、学生会員、賛助会員が所属しています。従来の美術館/博物館・図書館・公文書館・アーカイブおよび学会といった機関や職能を超領域的に融合する新しい学術団体として、本学会は、新しい未知な課題に取り組む方々の参加をえて、活動を展開しています。

本学会は、アート・ドキュメンテーション研究会として創設され、1999年に日本学術会議の第18期登録学術研究団体(情報学・芸術学)に加入後、2005年4月に現在の学会名に改称しました。その後、伝統ある英国美術図書館協会(ARLIS/UK & Ireland)の*Art Libraries Journal*(2013, Vol.38, No.2)の「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号の刊行に協力するなど、国際的視野にもとづいて現代社会の要請する人文学と情報学との連動を追究しています。

主な定期的活動として、年次大会、秋季研究集会、学会誌『アート・ドキュメンテーション研究』と会員ニュース誌『アート・ドキュメンテーション通信』刊行ほか、さまざまな研究集会・見学会、グループ活動、国際交流を实行

しています。学会内の各委員会・グループはつねに、今日的要請に即したデータベースの構築、アーカイブ・デザイン、また個別的な応用課題の解決に取り組み、着実な成果をあげています。

■活動内容

- ・研究会、講演会、見学会の開催
- ・地区部会とSIGの活動

現在、関西地区部会があり、自由に参加できます。

また、日常活動の場として、会員の興味に応じてSIG(スペシャル・インタレスト・グループ)を結成することができます。現在、美術館図書室SIG、デジタルアーカイブサロンSIG、JADS Archives and Archival Methods SIG(学会アーカイブSIG)、コレクションSIGがあり、自由に参加できます。

(地区部会・SIG連絡先:

<http://www.jads.org/contact/contact.htm#sig>)

- ・学会ウェブサイト(日本語版・英語版)の開設による情報提供・交換及びメーリングリストによる会員交流
 - ・情報・資料の収集・交換・提供
 - ・アート・ドキュメンテーション関係者の交流
 - ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』の発行
 - ・『アート・ドキュメンテーション関連文献目録』の作成・維持(上記『研究』および学会ウェブサイトで提供)
 - ・『アート・ドキュメンテーション関係機関要覧』の作成・維持(学会ウェブサイトで提供)
 - ・ドキュメンテーション関係諸機関・組織との幅広い連携
 - ・IFLA(国際図書館連盟)の協会会員として、美術図書館分科会の活動への参加・協力
 - ・ARLIS/UK & Ireland等各国の同種組織との連携
 - ・国際会議等参加支援のための助成金の支給
- その他、この会の活動に必要な事業を行います。

■会員の特典

- ・本学会の行う研究会・講演会・見学会などの活動に優先的に参加できます。
- ・通信誌『アート・ドキュメンテーション通信』(年3回)、論文誌『アート・ドキュメンテーション研究』(年1回)の配付を受けられます(賛助会員は各2部送付)。

■年会費〔年度単位〕

会員種別により、以下の会費となります。

- ・正会員 6,000円
(ただし、65歳以上は4,000円 [自己申告制])
- ・学生会員 4,000円
(大学学部、大学院などに在学中の学生.申込時に在学証明書または学生証のコピーを提出していただきます)
- ・賛助会員(個人または機関・団体) 一口以上
(一口 30,000円)
- ・団体購読会員 12,000円

■ウェブサイト

- ・活動の詳細については、学会ウェブサイトをご参照ください。<http://www.jads.org/>



■入会方法

- ・学会ウェブサイトから「入会申込書」をダウンロードし、必要事項をご記入の上、下記の間合せ先に郵送またはメール添付にてお送りください。役員会にて入会を承認された方に、初年次の年会費の振込用紙を送付します。なお、本学会は会費の入金をもって、入会手続の完了とします。

(入会申込書ダウンロード:

<http://www.jads.org/nyukai/nyukai.html>)



Art Libraries Journal (2013, Vol.38, No.2)

「日本のアート・ドキュメンテーション」特集号

お問合せ・お申し込み

アート・ドキュメンテーション学会事務局

〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-1-1

パレスサイドビル(株) 毎日学術フォーラム内

Tel : 03-6267-4550 Fax : 03-6267-4555

E-mail : maf-jads@mynavi.jp

2025年6月1日現在

JADS

アート・ドキュメンテーション学会
2026年度 年次大会予稿集
発行日: 2026年6月6日(土)
編集: アート・ドキュメンテーション学会

発行: アート・ドキュメンテーション学会
<http://www.jads.org/>